

平成23年度北九州市地方独立行政法人評価委員会（第5回）

日時：平成23年8月5日（金）

14:00～14:50

場所：北九州市役所 5階

特別会議室A

（事務局）

ただ今より、平成23年度第5回北九州市地方独立行政法人評価委員会を開催いたします。

はじめに、資料の確認をさせていただきます。お手元に配付してございます、資料の1枚目が次第でございます。そして、その次が、資料1「公立大学法人北九州市立大学の平成22年度に係る業務の実績及び第一期中期目標期間に係る業務の実績に関する評価（案）」、資料2が評価案が確定した際に大学に通知する文書でございます。資料3は、大学の意見申立期間後に大学に通知するものでございます。次に、資料4は、同評価を市長に報告する文書でございます。

それでは、議事に入りたいと存じます。これから先の進行は、委員長にお願いします。

（委員長）

それでは、議題に従って進めてまいりたいと思います。

議題の1は、「平成22年度実績及び中期目標期間実績に係る評価案について」でございます。まず、前回評価案から一部変更した点もございますので、その点につきまして、事務局よりご説明お願いいたします。

《事務局より説明》

（委員長）

ただ今、前回のご議論の内容を一部事務局のほうで変更していただき、それのご説明がございました。大方よろしいかと思いますが、細かな点についても、遠慮なく意見をおっしゃっていただければと思います。何かご意見等ございませんでしょうか。

（委員）

中期計画は6年間の、どう大学を改善していくか、進めていくかについてで、それに対して目標があります。年度計画は、その中期計画をすすめていく上で、毎年、更新していきますが、例えば、初年度で中期計画の目標を達成したら、あとの年度計画ではその中期計画を達成したものを守ればいいのですか。通常、初年度で達成したら、もう少し改善の余地はないかと私どもは考えるのですが、その辺はどう考えていらっしゃいますか。

（事務局）

大学側の出席者がいませんので、事務局から説明を申し上げますと、当然、中期目標に対して1年目で達成したとなると、計画自体は達成で終わります。ただ、毎年、普段の見直しは当然必要なので、それをプラスすると、特記すべき事項が出てきて、A評価となるのではないのでしょうか。通常の結果ではB評価になってしまいますが、それ以上に頑張ればA評価になると思います。

(委員)

分かりました。企業の場合は中期計画で目標を達成しますと、次の目標を設定するのが通常ですから、大学に関しても目標を達成したあとは次の改善へ繋げていけばいいのではないかという感想を持ちましたので、質問いたしました。

(委員長)

他に質問はございませんか。

(委員)

あえて言えばですが、リテラシーなどの言葉が直してありますが、22年度の分野別評価で分野に「インセンティブ」とあり、日常的にもその言葉を使っていますが、これはもう日本語でしょうか。

(事務局)

「インセンティブ」は『特典』などに置き換えることができますので、置き換えしたほうがよければ修正します。

(委員)

それはお任せします。私が読んで、ちょっと引っ掛かっただけです。

(委員長)

おっしゃるとおりで、例えばデータベースやカリキュラムなどは大学では共通語という気もしますが、どうでしょうか。

(事務局)

すみません、通常の一般の方を連想していましたので、ここはまた後ほど考えさせていただきます。

(委員長)

少なくとも「女子教員」と「女性教員」、これはやはり「女性教員」が正しいと思います。

(委員)

内容のことではないですが、このいただいた「22年度実績及び中期目標期間実績に係る評価案」について、中期に関しては123項目中評価が55項目ですが、22年度計画に関しては9項目です。そのため、激減していると見えてしまいます。通常、計画の初期は厳しい評価になり、だんだん時間が経ってできあがっていくものですが、そこは誤解されないような説明が必要ではないでしょうか。

例えば、市民に開示したときに、そのまま解釈すれば、中期目標はかなりうまくいったが、22年度計画で滞っているというふうに、データから見えてしまうと思います。ですから、それなりの理由があるのでしょうか、そこは何か説明が必要だと思います。

(事務局)

はい、工夫が必要かもしれません。こちらも考えさせていただきます。

(委員長)

今、委員がおっしゃったとおりで、これには2つの原因があると思います。

1つは、中期計画は項目数が多いということです。

それから、もう1つは、今、委員がおっしゃった部分、22年度の全体評価で記入しましたが、ずっと計画が進んできた中で、最後の年度が少しトーンダウンした気がします。

(委員)

水面下ですが、統計データで見ると違和感を感じました。

(事務局)

分かりました。工夫させていただきます。

(委員長)

他にご意見ございませんか。

(委員)

本当に、それぞれ委員の方の表現やトーンが違う中、よくまとめていただいたと思って、感謝しております。まとめられたことに関しては、別に異議はありません。

(委員長)

分かりました。

では、私のほうから1点だけよろしいでしょうか。中期計画の全体評価で、2ページの一番下、これは財務のことだと思いますが、「中期目標期間6年間の財務状況は良好であると判断する」となっていて、そのとおりですが、私どもはむしろ、評価をすることが主たる業務ですから、ここは「判断する」よりも「評価する」としたほうが、より良いと思います、いかがでしょうか。

(事務局)

はい、分かりました。そのように変えさせていただきます。

(委員長)

さきほど、委員もおっしゃったように、いろいろ表現が違いますので大変だと思いますが、ここまでまとめていただいて、ありがとうございました。

他にご質問等はありませんでしょうか。

それでは、ご質問ございませんでしたので、全体のこの評価そのものについて、議論をしてよろしいのでしょうか。

(事務局)

結構です。

(委員長)

全体の評価について、ご議論ございませんでしょうか。

(委員)

一般的なことでよろしいですか。

(委員長)

はい、どうぞ。

(委員)

2、3点あります。今日、大学の方がおみえになってないので、関係する分はぜひ大学に伝えていただきたいのです。

私個人のスタンスとしては、皆さん方をいろいろ厳しく批判するという立場よりも、北九州市大の将来のためにプラスになるような応援団と思って、いろいろコメントしております。

それで、幾つかその中で引っ掛かることがあって、その第1点は、科研費のことなのです。いろいろサゼスチョンしたことに對して、いろいろな工夫をしますということで、ずっとディスカッションに出てきたのですが、全てがほとんど、意識改革など、個人レベルの問題になっています。しかし、科研費を本当に取りにいこうと思うと、個人レベルの問題と同時に、組織レベルの問題を考える必要があると思うのです。例えば、情報を早く取ってきて、次に出てくるテーマに對して産学連携のグループをつくっておく、あるいは、どこにどういう研究をしている人たちがいるなどのデータベースをもってすぐ対応するなど、大学側、あるいは市も一緒になってもいいかもしれませんが、そういう組織的対応方法を考えていただけたらと思うのです。

東大が非常によく取っています。それは、確かに東大は優秀な人が多いのかもしれませんが、それと同時に、情報が早いので、次に来る科研費の準備を、科研費が公表される前からしているのです。太陽電池の研究を始めたと思ったら、ちょうどその半年後くらいに太陽電池の大きなプロジェクトが出てくるなどです。ですから、情報を組織としてうまくとるような工夫が必要なのです。

(委員長)

付け足しますと、今、先生がおっしゃるとおりで、情報を早く取得すると同時に、手続き的な問題なども含めて、いち早く先生方に伝えられる仕組みをつくるようにすると思います。やはり、1歩でも先にすることが大事ですから、組織的な機関をつくるなどです。

(委員)

そうです。やはり、厳しく言っても、個人レベルですと皆さん科研費の申請をしないというのは、どうせ申請しても当たらないからという意識があるからだと思います。何か仕掛けをつくって、申請したのが当たったという、一種のサクセスストーリーを経験されると、かなり意識も変わるのではないかと思います。申請してくださいというだけの個人レベルの問題だけでは、いつまでも改革できないと思います。

(委員長)

例えば、よその大学の傾向などを全部網羅するのです。そして、今度はこの分野がかなり有望など、今までの流れなどから予測できるはずなのです。

(委員)

関東の大学の先生方が、地方の九州の大学などに来られて、いろいろな話をする時に、そんないいテーマがあるのになぜ科研費の申請をしないのですかという話がよくあります。中央で、手あかの付いたようなテーマではないテーマがいろいろ眠っていると。ところが、地方大学にしてみたら、それは気が付かなくて、宝の持ち腐れになっていると。だから、そこら辺をうまく組織的に対応できたらいいと思います。

(委員長)

また繰り返しになって恐縮ですが、資源循環・環境制御システム研究所をつくった時に、私も市長から頼まれて参加しました。そうしたところ、まだ企業交渉などが済んでいなかったのです。だから、逆に、12大学が12地区で行う中で、今、その計画に乗る必要があるから早くしてほしいとお願いしたところ、最終的にそれが九州地区で1つだけ認められたということもあるのです。

だから、おっしゃるように、できるだけ早い時期に良い情報をつかむことは、絶対必要だと思います。ほかにご意見等ありますか。

(委員)

文系の科研費についても、弱者向けのいろいろな言語やIT関係などがJSTから最近よく出ています。それから、北海道大学などの、原住民の言語や北方民族との交渉の歴史、発掘すれば結構いろいろな文献もあると思います。だから、どうせ科研費を申請しても当たらないという意識に落ちている人に、申請してくださいと言っても、何も変わらないと思いますから、そこを組織でうまく成功体験をさせるようなことを考えてほしいです。

(委員長)

それと、やはり文系でも、個人ではなくて3～5人ぐらいのチームにして活動するというのも1つの方法です。最近多いのは、低所得者層などに対する支援でマイクロファイナンスです。これは新しい分野なのです。少し調査をすると、結構面白いものができるのではないかと思います。

(委員)

グラミン銀行みたいなですね。

(委員長)

そうです、この前、グラミン銀行は、九大にユヌス総裁が来ました。ああいうものを利用しない手はないと思います。

(事務局)

分かりました。

(委員)

もう1点だけあります。メールで送っていただきました(第4回委員会の)資料4の、質問事項と大学側回答の中に、何カ所か、「北九州市からも見直しを言われていないので」という記述がありますが、基本的に、北九州市と大学というのはどういう関係にあるのですか。結局、北九州市が方針を決めて、大学はそれを実施するということなのですか、それ

とも、大学の考え方と市の考え方は双方向なのでしょうか。

(事務局)

大学は独立法人化しておりますが、市は、お金の面などで、いろいろなアシストをしております。大学は自主という形で独立しておりますので、例えば、言われているように、市が立てた中期目標の中に入っていないという議論はあるかもしれませんが、市から言われていないからどうこうというのは、いかがなものかと思いますが、そのような記述がありましたでしょうか。

(委員)

中段に、市の見直し方針や地域計画に取り上げられていないので、今のところ、やるつもりはないというニュアンスで書いてあるので、それはちがうような気がしました。

(事務局)

毎年度で計画があります。

(委員)

そうです。市から言われたかどうかではなくて、大学独自でどうするかだと思います。

(事務局)

あくまでも独法ですから。当然、別の法人としての、きちんとした意志決定なり何なりは。

(委員)

きちんと自分たちで計画を立てて、自分たちで責任を取るべきです。それが、市が言っていないからという逃げ道に使われている気が、読んでいてしたので、それはちがうのではありませんかと思いました。

(委員長)

正直言いまして、やはり、最終的には大学の財政的なものを市が負担しているところもあり、平成 17 年度から独立行政法人としてやっていますが、まだ、その意識が少し残っている気がします。

ですから、今、委員がおっしゃったようなことも含めて、第 2 期の中期目標ではそういうことのないように、大学がきちんと主体性を持って、その中で、いろいろと財政的な問題などあったときには市と協議していく形であるべきです。

(事務局)

おっしゃるとおりだと思います。大学には伝えておきます。たまたま、違う意識で書いたかもしれませんが、そう読めしまうと伝えておきます。

(委員)

むしろ、大学のほうから、ぜひこういうことがやりたいと市に挙げていって、中期目標を作るくらいの自主性があるといいのではないかと思います。

(委員長)

それが本来の姿です。

(委員)

もう一步進めば、北九州市にとってのシンクタンクとして、北九州市立大学が活動できるのなら、数億円出しても全然惜しくないようになると思います。

(事務局)

おっしゃるとおりだと思います。

(委員長)

そして、それに伴って、情報の発信であり、文化の発信基地になっていくべきと思います。ぜひ、それは大学側に伝えていただいて、次の中期目標と、それぞれの年度計画の中で反映させていただきたいと思います。

(事務局)

はい、伝えておきます。

(委員長)

ほかに何かご要望はございませんか。

(委員)

第2期中期計画でも見受けられたのですが、いろいろの計画の中に、何々開発センターや何々研究所をつくるという内容があり、一般的には、たくさんつくるより、例えば、北九州市立大学研究所というものをつかって、その中にいくつかのテーマごとに部門を置いたほうが効率的ではないかという感想を少し持ちました。

(事務局)

経営マネジメントや効率性の話をされていると思いますが、それぞれのテーマでそれぞれに館を造っているような状態で、事実上ばらばらではないかという話でしょうか。

(委員)

そうです。

(事務局)

詳しい内容は分かりませんが、何らかの目的でつくり、その目的が達成したあとは、当然、改廃となりますが、今、中期計画を6年間やって、離陸したばかりですので、過渡期であろうと思います。今後、どういう形で統合されて、マネジメントをしていくかは、まさに第2期計画でふれていくと思います。

(委員長)

やはり大学教育の改革を比較したときに、研究面の進度がやや、と言ったところはそので、大学としてどういう研究に優先順位を与えてやるべきか。そのためには、それぞれ別個に横に羅列するのではなくて、大学の研究体制として、どれに優先順位を付け、どれに

お金をといた全体のマネジメントをすれば、研究の成果も上がるし、そこに競争も出る気がします。だから、そういうことをもう少し活発にすべきだと思います。

(事務局)

今日は大学が来ていないので、知っている範囲で申し上げますと、この研究領域は、個別の分野で造っています。それは、スクラップ・アンド・ビルドが基本思想のようです。だから、その時代の要請に応じて、当然、研究領域は変わるべきで、例えば、ある特定分野において、パフォーマンスがあまり出ていないにもかかわらず、組織としては恒常的にある、そんな研究体にはしたくないというのが、最初の根本思想にあったようです。その流れをくんで、こんな形になっているのが、現状のようです。ただ、委員のご指摘の部分は大学に伝えたいと考えています。

(委員長)

他に何かございませんか。

(委員)

既に私がこの評価委員になった時には、その目標・計画は定められていて、それに対する評価しかできない状況でした。その中で、例えば、設備投資なりに財務のお金をかけるとしても、少し優先順位が違うのではないかと、では、その疑問は評価でどこに付けたらいいのかという疑問がありました。また、少し厳しい言い方ですが、そういうことはないかと大学側もおっしゃっていましたし、そうではないとも思うのですが、評価できるものを計画に先に出したのではないかと感否めませんでした。評価も大事ですが、目標や計画の評価もより大事だと感じました。

(委員長)

例えば、数値目標に対して、そこまでいけばそれでいいというような傾向が今まで結構あったのではないかと思います。しかし、これからは、計画通りである・なしだけではなく、内容や質的水準にももう少し目を向ける必要があると思います。そして、計画そのものも、そういうところにシフトしていかなければいけないし、ある段階まで達成できたら、次の年度以降、さらにその上を目指していくべきだと思います。大学の規模としてはちょうどいい規模でかなり適正規模だと考えます。これからも、大学の特色、独自性、北九州地域における大学の在り方などをもっと出して、伸ばしていただければと思います。

(委員)

第1期ということで、大学も、評価委員会も手探りで、評価できるもの、しやすいものがまず最初に打ち出されたと思いますが、今後、それが逆に、評価のための目標になってはいけなと感じました。いい方向に向かっていくように、大学と評価委員が議論していくべきと思っていますので、よろしく願いいたします。

(委員長)

そのとおり進めていただきたいと思います。この委員会も、少しはそういう方向へもっていきたいです。

それでは、いろいろと大学に対する一般的な要望やご意見等がございましたが、本日のメインの議題、最終的な評価案につきまして、先ほどの事務局案どおりでよろしいでしょ

うか。

(一同「異議なし」)

(委員長)

では、事務局案どおりに決定させていただきますので、よろしくお願いいたします。
今後の予定について、事務局からお願いいたします。

《事務局より説明》

(委員長)

事務局の説明についてご意見はございませんか。

(一同「異議なし」)

(委員長)

それでは、この評価とは別に、さきほど、いくつかご意見が出ましたので、評価案とは別に、評価委員会としていくつかの意見や要望が出たことを、まとめていただいて、大学にお示しいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

(委員)

ぜひ、お願いします。

(委員長)

では、1枚別のものでまとめてください。よろしくお願いいたします。それでは、本日の委員会を終了させていただきます。

どうも、委員の皆様方、お疲れさまでした。